プロ野球に学ぶ、ミスターと呼ばれし者の流儀（第14回）

二流打者・川藤幸三が成し遂げた一流の仕事とは？

2017.06.29



川藤幸三氏といえば、“代打の神様”として、阪神タイガースファンから愛された選手の1人である。現役引退後は野球解説者・評論家として活躍するだけでなく、バラエティー番組にも出演し、特に関西地方では絶大な知名度を誇っている。

そんな川藤氏ではあるが、選手としての成績はパッとしなかった。プロ入りから19年間の通算成績は、211安打、108打点、16本塁打、打率2割3分6厘。一流打者であれば3年もすれば残せそうな数字を、19年かけてようやく残した。

“二流”の成績しか残せていない川藤氏がなぜファンから愛されたのか？それは川藤氏が、一流選手にはできない仕事をしていたからである。

若手時代から発揮された「愛される才能」

川藤氏が阪神に入団したのは、1967年のシーズンオフ。高校時代に春夏の甲子園には出場していたものの、ドラフトの順位は9位と、まったく期待されていなかった。控えとして出番が回ってきても、与えられた仕事は守備固めか代走という地味なものだった。

若い頃の川藤氏は、2軍で盗塁王に輝いたこともある俊足の持ち主だった。だが、「守備や、走塁に対する評価は低い。いくらそれを磨いても、やって当たり前で、評価されることはない。認められるためには、『打撃』を磨くしかない」と決意。足が痛いと偽っては、守備や走塁の練習を避け、打撃練習だけに打ち込んだ。

そんな川藤氏を助けたのが、裏方の人々だ。川藤氏は、ピッチングマシンを使った打撃練習が嫌いで、人の投げるボールしか打ちたくなかったため、用具係の小笠原正一氏に打撃投手を頼んだ。元阪神の投手だった小笠原氏は、一銭にもならない川藤氏のバッティング投手を引き受けた。

また、川藤氏が屋内練習場で黙々とトレーニングをしていると、甲子園球場のグラウンドキーパーが「たまには本球場のグラウンドでやれや。球はワシらが拾ったる」と声を掛けた。川藤氏の“愛される”才能は、この頃から発揮されていた。

「川藤を出せ～」「ホンマに出すな～」

練習のかいもあり、一軍に定着した川藤氏であったが、かといって目立った成績が残せたわけではない。球団側は1983年のシーズン後に「選手生活もしおどき」と、川藤氏に引退を迫った。

しかし、諦めきれない川藤氏は「現役をもう1年続けさせてくれはるんやったら、どないな条件でも受けましょう。年俸は2分の1。ずっと2軍でも一切文句は言わない」と懇願。結果的にこれが受け入れられ、川藤氏は翌シーズンも阪神に在籍することになった。

こうした川藤氏の“浪花節”で献身的な姿勢は、ファンに愛された。チームがチャンスになると、スタンドからは「川藤を出せ～」のヤジが飛び、そして川藤氏が代打で出ると「アホか～ホンマに出すな～」というイジりのようなツッコミが飛んだ。

ファンからも愛される人気選手となった川藤氏は、結果的に1985、1986年シーズンまで阪神との契約を勝ち取ることになった。

「今回の優勝にはこいつの執念も入っとるんじゃ」… 続きを読む